

ポライトネス・ストラテジーとしての 「思う」と「생각하다」(その2)

—断定型の発語内の力を持つ文において—

李 鳳*

(e-mail: koreabong@imc.hokudai.ac.jp)

目次

1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 理論的背景
 4. 分析方法
 5. 考察
 6. おわりに
-
-

1. はじめに

モーダルな「思う」とそれに対応する韓国語の「생각하다」は、共にヘッジ(hedge)として機能している(李鳳 2009a)。ヘッジをすることは、話者の発話によって伝えられている命

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院, 助教, 韓日対照研究

題に対して、話者が限られた確信、関与を持っていることを伝達する語用論的な現象である(Itani1996:30)。このような特徴が存在するのは、聴者に歓迎されない効力を持つ発話行為の力を軽減するためである¹⁾。モーダルとしても実現されるヘッジは、フェイス(face)を守るためのポライトネス・ストラテジーの一つである。そして、主としてネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを実現するために使われる(B&L1978/1987:162)。モーダルの「思う」と「생각하다」は、共通して発語内の力を弱めて主に、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つとして用いられるが、その使用は、日本語と韓国語では相違がある²⁾。

(1) a. 韓国の今の教育制度は違っていると思います。

b. それでは、これから会議を開きたいと思います。

(2) a. 한국의 현재 교육제도는 잘못되었다고 생각합니다.

b. ?그럼, 지금부터 회의를 시작하고 싶다고 생각합니다.

(2ab)は、それぞれ(1ab)の日本語に対応する。(1a)に対応する(2a)では、「생각하다」が用いられている。ところが、(1b)を(2b)のように韓国語に対応させると非常に不自然な文になる。(1ab)、(2ab)における「思う」の用法とそれに対応する韓国語の「생각하다」の用法に差があることは、ヘッジの使用に関するポライトネス・ストラテジーの相違によるものであると考えられる。

李鳳(2015)では、指示型(directives)の発語内の力を持つ文と共に起する「思う」と「생각하다」について考察を行った³⁾。Brown&Levinson(1978/1987,以下 B&Lと略記)の「フェイス侵害度見積もりの公式」を理論的な枠組みとして用いて分析した結果、「思う」は、1)相手にかかる負荷度が大きくて社会的距離が遠い人間関係と、2)相手にかかる負荷度が大きくて社会的距離が中間の人間関係と、3)相手にかかる負荷度が小さくて社会的距離が遠い人間関係で、「思う」がヘッジとして用いられることが明らかになった。一方、

1) ヘッジに関する詳しい説明は、李鳳(2009a)を参照されたい。

2) モーダルな「思う」と「생각하다」は、発話時現在において使われ、話者以外の心的態度を表すことはできず、話者の心的態度を表す。また、過去の意味になり得なく、否定と仮定のスコープにないという特徴を持ち、「認識的モダリティ(epistemic modality)」としての基本的な性質を共有している。詳しいことは、李鳳(2009b)を参照されたい。

3) 「発語内の力(illocutionary force)」及び指示型と断定型といった発話行為に関する概念の説明は、李鳳(2015)で説明を行ったため、ここでは省略されたい。

「생각하다」は、指示型の発語内の力を持つ文においては、社会的距離の遠近、相手にかける負荷度の大小によらず、ヘッジとして用いると不自然になることが明らかになった。

ここでは、断定型(assertives)の発語内の力を持つ文と共起する「思う」と「생각하다」について考察を行う。そして、「思う」と「생각하다」の類似性と相違に関する性質が、話者と聴者の人間関係と相手にかける負荷度という2つの要因に基づく日本語と韓国語におけるポライトネス・ストラテジーの相違によるものであることを示す。

2. 先行研究

「思う」と「생각하다」に関する対照研究は、近年、議論が始まったばかりである(千守城 2005、鄭夏準 2006、生越 2008a、李鳳 2008)。まず、千守城(2005:37-38)は、「思う」を日本語独特の言い回しの一つとして取り上げ、韓国語翻訳における困難さを指摘している。同様に、鄭夏準(2006)は、韓国語で翻訳されている日本の小説を対象とし、「思う」の韓国語の翻訳例を調べている。そして、「思う」が「생각하다」に対応する場合から、この他にも10種類以上のさまざまな形態に対応されていることを観察している。千守城(2005)は、「思う」と「생각하다」の使用に差があることを最初に示唆したものとして考えられる。また、鄭夏準(2006)は、実際に記述的研究を行ったものとして位置づけられる。また、同年度発表された生越(2008a)と李鳳(2008)は、「思う」と「생각하다」の用法の差がモーダルな用法にあることについて気が付き、議論が始まっている。生越(2008a)も李鳳(2008)も共通して森山(1992)で示された「思う」のモーダルな用法、つまり、「不確実表示用法」と「主観明示用法」の区別をもとにして、対応関係を考察しているが、その違いの性質を分析するところまでには至らなかった⁴⁾。

以上のことから解るように、「思う」と「생각하다」に関する対照研究の数は少なく、これまでの研究では、理論的な枠組みが欠けていたため、「思う」と「생각하다」の類似性と相違を体系的に関連付けて説明することができなかった。本研究は、この問題に適切に取り組むため、ポライトネス理論といった理論的枠組みを用いてヘッジとして機能している「思う」と「생각하다」の用法の違いを分析する。そして、断定型の発語内の力を持つ文と共起する「思う」と「생각하다」の類似点と相違を明らかにする。

4) 詳しいことは、李鳳(2008)を参照されたい。

3. 理論的背景

これまでの日本語と韓国語の対照研究は、方法論的に深化されていなかったことがしばしば指摘されてきている。塚本(1997:42)は、日本語と韓国語の本質的な相違点を明らかにするためには、「両言語を対照することによって、一言語を見ていただけではわからないより奥深いことが何か言えないか、という探究の姿勢を常に持って問題に取り組むことである」と指摘している。そして、日韓対照研究の現状を打破するために、今後取るべき方向性の一つとして、「言語理論研究への貢献」をあげている(塚本1997:43)。B&L(1978/1987:76-83)が指摘しているように、ポライトネス理論では、同じ行動でも、文化によって捉え方が異なるということを考慮し、文化差を言語使用における重要な変数の一つとして考えている(宇佐美2002:100)。このため、ポライトネスは、文化価値を取り入れて日本語と韓国語の対照研究を行うことを可能にする重要な概念の一つであると考えることができる。本研究は、ポライトネス理論の枠組みを用いて日本語と韓国語のヘッジとして機能している「思う」と「생각하다」の用法の違いを比較し、分析する初の試みである点に意義を持つ。

日本語の研究においてポライトネスという用語が最初に用いられたのは、日本語学、日本語教育に関する学界であり、近年のことである(宇佐美2002:100)。

一方、日本語と韓国語の対照研究においてポライトネスが用いられたのは、日本語学、日本語教育における研究より少し遅れている。2000年代以降、日本語と韓国語の言語行動に見られる違いを論じるのに、ポライトネスという概念を取り入れて分析を行う研究が見られるようになった。筆者が調べた限り、元智恩(2005)を初めとし、いくつかの研究がある。これらの研究においては、殆ど言語行動の談話構造に関する分析が行われている。代表的なものとしては、日本語と韓国語の「断り」の言語行動を対照したもの(元智恩2005)、「文末スタイルの運用」を対照したもの(申媛善2008)、「依頼」の談話を比較したもの(柳慧政2012)などがあげられる。

また、社会言語学の分野では、「配慮」という用語を用い、日本語と韓国語の「配慮」の示し方について、いろいろな言語行動に注目し、比較が行われている。「配慮」に関して、相手を尊重する言語行動を「狭義の配慮」と呼び、丁寧ではなくても相手が心地よく感じる言語行動や「狭義の配慮」をしない行動も「広義の配慮」と呼んでいる(生越2012:173)。しかし、「狭義の配慮」であれ、「広義の配慮」であれ、ここで言う「配慮」の概念は、B&L(1978/1987)のポライトネスの概念に対応しており、ポライトネスの概

念を用いて分析できるように思われる。代表的な研究としては、相手の所有物を使う際の言語行動を比較した研究(生越2008b、生越2012)、相手の依頼を断った後の修復行動に関する比較を行った研究(임영철他2011)があげられる。これらの研究では、ポライトネスの枠組みを使ってはいないが、実質的にポライトネスの枠組みに関わる研究となっている。

現在、ポライトネス理論には、4つの主要なモデルがある(宇佐美 2002、Huang2007)。その中で、最も影響力があり、包括的なモデルは B&L(1978/1987)の「フェイス保持のためのストラテジーとしてのモデル」である(宇佐美 2002、Huang2007 など)⁵⁾。本研究でも、「思う」と「생각하다」との間にある類似性と相違がフェイス(face)を守るためのストラテジーと関わっていると考えるため、B&L(1978/1987)の「フェイス保持のためのストラテジーとしてのモデル」を理論的な枠組みとして用いる。そして、「思う」と「생각하다」との間にある類似性と相違は、同じ行動でも、日本と韓国の文化による、B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」における変数の差によって、ポライトネスの表現方法が大きく異なるためであると説明できる。ヘッジは、ポライトネス・ストラテジーの一つであり、ヘッジとして機能している「思う」と「생각하다」における類似性と相違は、ヘッジの使用によるポライトネス・ストラテジーの相違によるものと考えられるからである。

4. 分析方法

分析には、李鳳(2015)で示した方法と同様に、B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」を用いる。B&L(1978/1987)は、具体的に数量化できるわけではないが、「フェイス侵害度(W_x)」は、おそらくはすべての文化で、3つの要因によって総合的に規定されるとして、以下のように公式化している。

$$(3) W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x \quad (\text{B\&L1978/1987:76})$$

⁵⁾ B&L(1978/1987:62)は、人間の基本的な欲求としてフェイスという高度に抽象的な概念があると考えている。このフェイスには、「ネガティブ・フェイス」と「ポジティブ・フェイス」の2つのフェイスがあるとしている。宇佐美(2002:98)は、「ネガティブ・フェイス」とは、他人に邪魔されたくない、立ち入れたくないという「マイナス方向」への欲求であり、「ポジティブ・フェイス」とは、他人に理解されたい、好かれたい、他人に近づきたい、結束を高めたいという「プラス方向」への欲求であると説明している。B&L(1978/1987)は、この2つの「フェイス」が脅かされないように配慮することがポライトネスであると述べている。

ここで、 W_x は、フェイス侵害度(FT 度)、行為(x)が相手のフェイスを脅かす度合いである。まず、D は、話者(S)と聴者(H)の「社会的距離(social distance)」を示す値である(B&L1978/1987:74)。通常、D の評価における大切な部分の一つは、安定的な様々な社会的属性に基づく社会的距離の測定であり、社会的親密さは、一般に、ポジティブ・フェイスを互いに満たしあうことに反映される(B&L1978/1987:77)。

また、P は、聴者(H)の話者(S)に対する「力(power)」の量である(B&L1978/1987:74)⁶⁾。つまり、P は、聴者(H)が自分の計画や自己評価を、話者(S)の計画や自己評価を犠牲にしても、押し付けることができる程度を指す。P の大きな差異は、敬意に典型的に反映される(B&L1978/1987:77)。

R_x は、「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み(absolute Ranking of imposition)であり、その $FTAx$ が特定の文化でどの程度負担と見なされるかと示す値である(B&L1978/1987:76)。つまり、ネガティブ・フェイス欲求とポジティブ・フェイス欲求がどの程度侵害されることになると考えられるかによる、文化的かつ状況的に規定される負担の順序のことである(B&L1978/1987:77)。

なお、ここでは、話者と聴者は、共に MP(model-person)であり、相互の利益にかなう合理的な行為者同士であることを想定したものである。このような仮定は B & L(1978/1987:59-60)によって行われている。

以下では、ポライトネス理論の「フェイス侵害度(W_x)」で取り上げられた、社会的距離(D)、相対的力(P)、相手にかける負荷度(R)という変数を用いて、分析を行う⁷⁾。

D は、生越(2008、2012)に従って、次の 3 段階に分けて分析する。

- (4) a. 知り合いになったばかりで、心理的距離が遠い人間関係
- b. 年齢も近く、同じ学校に通うサークル仲間という心理的距離が遠くもなく近くもない中間の人間関係

6) 宇佐美(2002)は、D と P に関して、日本の敬語研究で指摘されてきた「親疎」、「上下」という社会的変数と非常に似ていると指摘している。しかし、宇佐美(2002)は、「B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」は、これらの変数が「 $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$ 」という公式の中で総合的に考慮され、相手のフェイスを脅かす度合いに縮約され、その高低が見積られた上で、言語行動が決定されるという捉え方にまとめられると述べている(宇佐美 2002:101)。さらに、宇佐美(2002)は、この点で、B&L(1978/1987)の研究は、従来のポライトネス研究、敬語研究のアプローチいずれとも大きく異なり、ポライトネス研究に画期的な展開を切り開いたと評価している。

7) 以下では、便宜のために、それぞれ社会的距離(D)は D に、相対的力(P)は P に、相手にかける負荷度(R)は R に略す。

c. 家族関係という、他の人には話さないような個人的な感情や考えも共有するような心理的な近い人間関係

そして、Pに関しては、生越(2008b、2012)と同様に、「思う」と「생각하다」の使用においてもPによる相違は殆どないと考えられるため、Pは、同等であるものとして設定する。また、Rに関しては、相手にかける負荷度の度合いが大きい場合と小さい場合の2段階に分けて考察を行う。Rが大きい場合は、取引や身の拘束に関わるものと設定し、小さい場合は、無料の品物を設定する。つまり、Pはすべての状況で影響がないものと想定した上で、Dは3段階、Rは2段階に分けて分析を行う⁸⁾。また、Rは、Dの段階に合わせて、同程度の負荷度の内容を設定した。そして、指示型の発話内行為について、内容の重要度が高い話題と低い話題について分析するが、このそれぞれの場合に、ヘッジの使用の適切さが人間関係Dの距離が遠い者、中間的な者、近い者によってどのように変化するかを調べる。

5. 考察

まず、相手にかける負荷度Rが大きい場合から説明する。

第一に、Rが大きくて、Dが遠い人間関係の例から見よう。話者(S)と聴者(H)は、知り合いになったばかりで、心理的距離が遠い人間関係で、共に大学教授である。今、学内では、キャンパスの移転問題に関する会議が開かれている。キャンパスをより都市部に移転することで、定員割れに歯止めをかけようと言うのが発端である。話者(S)は、賛成意見を持っており、聴者(H)の中では、反対意見を持っている人もいる。次は、話者(S)の発言である(以下も同じ)。

まず、日本語の例を見よう。

- (5) a. ここまで定員割れが続く以上、キャンパスを移転するべきだと思います。
- b. ここまで定員割れが続く以上、キャンパスを移転するべきです。

⁸⁾ ただし、Dに関しては、多少、コンテキストに揺れが有り得る。なぜなら、言語使用において話者(S)の個別性は千差万別であり、聴者(H)との関係も固定化するの難しいと考えられるからである。

(5ab)のように、聴者(H)に自分の考えや意見の正しさを押し付けることは、主として聴者(H)のネガティブ・フェイスを侵害することであり、相手が持っている価値観や考えを威嚇することになる(B&L1978/1987:65-66)。(5a)は、話者(S)と聴者(H)の心的距離が大きいことを示すのが規範的使用である「です・ます」に加え(井出 2006:50-52)、「思う」をヘッジとして用いることで、賛成/反対意見が混交する会議の場で、「自分は移転に賛成」という立場を取ることを反対意見の人のネガティブ・フェイスを尊重しながら伝えている。また、心的距離間のある聴者(H)に向け、「思う」を用いることで自分の意見に曖昧さを示し、主張を和らげている。これに対して、(5b)は、丁寧語の「です・ます」だけで言い切っている。(5b)は、断定的な言い方をすることで、周囲の意見に流されることなく、移転に賛成の立場を取ることをそのまま伝えている。

次に、韓国語の例を見てみよう。(6ab)の韓国語は、(5ab)の日本語に対応する。

(6) a. 여기까지 정원미달이 계속되는 이상, 캠퍼스를 이전해야 한다고 생각합니다.

b. 여기까지 정원미달이 계속되는 이상, 캠퍼스를 이전해야 합니다.

韓国語においても、(6a)が示しているように、「입니다・습니다」に加え、ヘッジとして「생각하다」を用いることで、主張を和らげており、知り合いになったばかりの聴者(H)のネガティブ・フェイスを尊重しながら伝えることができる。しかし、(6b)が示しているように、韓国語でも、人間関係が疎の間柄で使われる丁寧語の「입니다・습니다」だけで言い切ってしまうと、日本語と同様に、話者(S)の考えをそのまま伝えることになり、反対の意見を持っている聴者(H)の考えを尊重せず、自分の意見を主張することになる。

このように、断定型の発語内の力を持つ文において負荷度 R が大きくて、人間関係 D が遠い場合は、日本語でも韓国語でもヘッジとして「思う」と「생각하다」が用いられる。また、日本語でも韓国語でも、ヘッジの「思う」と「생각하다」を付けないと、反対意見を持っている聴者(H)のネガティブ・フェイスを威嚇することになる。

第二に、Rが大きくて、Dが中間の人間関係で、例を見てみよう。話者(S)と聴者(H)は、年齢も近く、同じ学校に通うサークル仲間である。しかし、いつも練習しているところは、周囲からの邪魔が多く、練習する場所を移すことを話している。まず、日本語の例を見てみよう。

- (7) a. 練習場を移した方がいいと思うよ。
- b. 練習場を移した方がいいよ。

(7ab)が示しているように、「思う」が用いられている(7a)も、「思う」が用いられていない(7b)も自然であるが、少し意味の相違がある。(7a)は、ヘッジとして「思う」が用いられ、あくまでも話者(S)の考えが個人的な意見であることを示すことにより(森山1992:113)、聴者のネガティブ・フェイスを尊重している。しかし、(7b)は、(7a)よりも緊急性が高く、聴者(H)の意見に関係なく、移転以外の選択肢はないという強い主張の力がそのまま伝わっている。次に、韓国語の例を見てみよう。(8ab)の韓国語は、(7ab)の日本語に対応する。

- (8) a. ?연습장을 옮기는 게 낫다고 생각해.
- b. 연습장을 옮기는 게 나아.

(8ab)が示しているように、韓国語では、むしろ「생각하다」が用いられている(8a)は、不自然であり、「생각하다」が用いられていない(8b)は、自然である。(8ab)は、Rが大きい、周囲から邪魔が大きいことで、練習場を移した方がいいといった話者(H)の主観的な意見を聴者(H)に伝えている。話者(S)と聴者(H)は、人間関係が遠くないサークル仲間であるため、(8a)のように「생각하다」を用いると回りくどい。つまり、「생각하다」をヘッジとして用いると不自然になる。

このように、断定型の発語内の力を持つ文において、相手にかける負荷度Rが大きくて、Dが中間の人間関係の場合は、日本語では「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では「생각하다」は、ヘッジとして用いにくい。

第三に、Rが大きくて、Dが近い人間関係で、例を見てみよう。兄の話者(S)は、以前から引っ越しを希望していたが、弟の聴者(H)にずっと反対されている。話者(S)は、両親が他界して、兄弟二人で住むには広すぎる家を処分しようと思っている。それに対し、聴者(H)は、思い出の詰まった生家を離れがたい気持ちでいる。次は、話者(S)の発言である。

まず、日本語の例を見てみよう。

- (9) a. 家の管理が難しくなった以上、引っ越すべきだと思う。
- b. 家の管理が難しくなった以上、引っ越すべきだ。

(9ab)が示しているように、「思う」が用いられている(9a)も、「思う」が用いられていない(9b)も、自然であるが、少し意味の相違がある。(9a)は、転居に反対する聴者(H)の気持を汲んだうえで、それでもなお、転居しなければならない十分な理由があるといったことを主張している。つまり、聴者(H)のネガティブ・フェイスを尊重し、「思う」がヘッジとして用いられている。これに対して、(9b)は、を聴者(H)の意見を(9a)ほど重要にとらえず、家の管理が困難であるという「現実」に重心を置いて話者が自己主張を行っている。

次に、韓国語の例を見てみよう。(10ab)の韓国語は、(9ab)の日本語に対応する。

(10) a.??집 관리가 어려워진 이상 이사 가야 한다고 생각해.

b. 집 관리가 어려워진 이상 이사 가야 해.

(10ab)が示しているように、引っ越しというRが大きいこととは言え、弟というDが近い聴者(H)に対して自分の意見を主張する際、(10a)のように「생각하다」を用いるのは回りくどい。つまり、「생각하다」をヘッジとして用いると不自然になる。反対している聴者に対する主張であるため、(10b)のように、「생각하다」を用いて発話の力を和らげないで、そのまま命題を伝えるのが効果的である。

このように、断定型の発語内の力を持つ文において、相手にかかる負荷度Rが大きくて、家族関係のようにDが近い場合は、日本語では、「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では、「생각하다」は、ヘッジとして用いられにくい。

今度は、相手にかかる負荷度Rが小さい場合を説明する。

第一に、Rが小さくて、Dが遠い人間関係で、例を見てみよう。話者(S)と聴者(H)は、知り合いになったばかりで、心理的距離が遠い人間関係で、共に大学教授である。今、会議でコーヒーマーカーの設置場所を話し合っている。話者(S)は、学生との共有スペースに設置するのがいいと思っている。それに対し、聴者(H)は、教員専用の控室に設置することを望んでいる。

まず、日本語の例を見てみよう。

(11) a. 私は、学生との会話も弾む共有スペースへの設置がいいと思います。

b. 私は、学生との会話も弾む共有スペースへの設置がいいです。

(11ab)が示しているように、「思う」が用いられている(11a)も、「思う」が用いられてい

ない(11b)も自然である。(11a)は、「思う」がヘッジとして用いられ、聴者(H)のネガティブ・フェイスを配慮している。また、(11b)は、話者(S)と聴者(H)の心的距離が大きいことを示すのが規範的使用である「です・ます」のみが用いられている。比較的軽い話題のため、「思う」のニュアンスがこれまでの例文と比べて、それほど強いものとなっていない。見方を変えれば、相手にかかる負荷度Rの大小が「思います」と「です・ます」の違いを眼立たなくさせている。

次に、韓国語の例を見てみよう。(12ab)の韓国語は、(11ab)の日本語に対応する。

- (12) a. 저는 학생과 대화도 할 수 있는 공유 스페이스에 설치하는 것이 좋다고 생각합니다.
 b. 저는 학생과 대화도 할 수 있는 공유 스페이스에 설치하는 게 좋습니다.

(12ab)が示しているように、韓国語でも「생각하다」が用いられている(12a)も、「생각하다」が用いられていない(12b)も自然である。(12a)は、聴者(H)のネガティブ・フェイスを配慮して「생각하다」がヘッジとして用いられている。また、(12b)は、丁寧語の「합니다・습니다」のみが用いられているが、比較的軽い話題であるため、「생각하다」を用いて発話の力を弱めなくても特に抵抗が感じられないように思われる。

このように、断定型の発話内の力を持つ文において相手にかかる負荷度 R が小さくて、D が遠い場合は、日本語でも韓国語でもヘッジとして「思う」と「생각하다」が用いられる。

第二に、Rが小さくて、Dが中間の人間関係で、例を見てみよう。話者(S)と聴者(H)は、サークル仲間である。部室に新しい冷蔵庫を置こうとしている。話者(S)は、賛成であり、聴者(H)は反対の立場を取っている。まず、日本語の例を見てみよう。

- (13) a. そろそろ、新しい冷蔵庫にした方がいいと思うよ。
 b. そろそろ、新しい冷蔵庫にした方がいいよ。

(13a)がやや丁寧であるが、親しさが伝わるのは(13b)であると言えよう。(13a)は、ヘッジとして「思う」を用いることによって、聴者(H)が反対するなら、「まだ購入しなくてもいいよ」という「譲歩」の可能性を残している。しかし、(13b)は、やや断定的な働きかけとなっている。

次に、韓国語の例を見てみよう。(14ab)の韓国語は、(13ab)の日本語に対応する。

- (14) a. ??이제 슬슬 새 냉장고를 바꾸는 게 좋다고 생각해.
 b. 이제 슬슬 새 냉장고를 바꾸는 게 좋지.

(14ab)が示しているように、韓国語では、人間関係の遠くないサークル仲間に提案する際、むしろ「생각하다」が用いられている(14a)は、不自然であり、「생각하다」が用いられていない(14b)の方が自然である。Dが中間の人間関係で、Rが小さいものに関して主張する際、(14a)のように「생각하다」が用いると回りくどい。

このように、断定型の発語内の力を持つ文において、相手にかける負荷度Rが小さく、Dが中間の人間関係の場合は、日本語では、「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では、「생각하다」をヘッジとして用いると不自然になる。

第三に、Rが小さくて、Dが近い人間関係で、例を見てみよう。話者(S)である妹は、姉に今夜のメニューとしてカレーがいいと言っている。それに対し、姉は、ラーメンがいいと言っている。まず、日本語の例を見てみよう。

- (15) a. 今夜は、カレーがいいと思う。
 b. 今夜は、カレーがいい(よ)。

(15ab)が示しているように、「思う」が用いられている(15a)も、「思う」が用いられていない(15b)も、自然である。(15a)は、聴者(H)の意見を尊重し、「まだ待つ余裕がある」といった意味を含めており、複数のメニューの中で、カレーを「選択」する場合に用いられる。つまり、「思う」がヘッジとして用いられている。これに対して、(15b)は、聴者(H)が反対していても、「具体的な理由」があるなら使われる。

次に、韓国語の例を見てみよう。(16ab)の韓国語は、(15ab)の日本語に対応する。

- (16) a. ??오늘 저녁은 카레가 좋다고 생각해.
 b. 오늘 저녁은 카레가 좋아.

(16ab)が示しているように、韓国語では、むしろ「생각하다」が用いられている(16a)は、不自然であり、「생각하다」が用いられていない(16b)は、自然である。Rが小さく

て、Dが家族のような近い人間関係で、夕飯のメニューに関して言う際、(16a)のように「생각하다」が用いて曖昧さを残すのは好ましくない。つまり、この場合、韓国語では、「생각하다」は、ヘッジとして用いられない。このように、断定型の発語内の力を持つ文において、相手にかかる負荷度Rが小さく、家族関係のようにDが近い場合は、日本語では、「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では、「생각하다」をヘッジとして用いると不自然になる。

6. おわりに

本研究では、ポライトネス・ストラテジーとして用いられるモーダルな「思う」と「생각하다」について、特に、断定型の発語内の力を持つ文に現れる場合を対象として考察を行った。

B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」を理論的な枠組みとして用いて分析した結果、断定型の発語内の力を持つ文において「思う」は、Rの大小、Dの遠近によらず、すべての場合においてヘッジとして用いられることが解った。一方、「생각하다」は、相手にかかる負荷度Rが大きくて、Dが遠い人間関係と、Rが小さくて、Dが遠い人間関係といった2つの場合に限り、共にヘッジとして使われることが分かった。この他の場合に、「생각하다」をヘッジとして用いると不自然になる。

Itani(1996)は、「ヘッジの適切な量(the ‘appropriate’ amount of social hedging varies)」に関しては、文化的な側面が重要な役割を果たしていると説明しているが、ヘッジとして「思う」と「생각하다」の使用は、この指摘を裏付けており、日本語のコンテキストと韓国語のコンテキストの間でも同様のことが起こっていると考えられる。

本研究では、作例を用いて分析を行っているが、実際、「思う」と「생각하다」の使用は、音調や他の終助詞との結合によってまた差が出てくると思う。また、多量の使用に関するデータに基づいて分析していく必要もあるだろう。ここでは、ポライトネス理論に基づいて「思う」と「생각하다」の類似点と相違の説明を試み、これ以上踏み込むことができなかったが、これらはすべて今後の研究課題として残したい。

[付記]

本稿は、筆者の博士論文の 7 章と 8 章の内容を基にして、韓国日本文化学会第 47 回国際学術大会において発表を行ったものを加筆・修正したものである。本稿の執筆に際し、3 名の査読者の方に、詳細かつ貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を申し述べたい。また、本研究を進める上で、指導教員の上田雅信先生から、長年に渡り、多くの示唆と助言をいただいた。この場を借りて深くお礼申しあげる。ただし、当然ながら、本稿の不備の責任は、すべて筆者に帰するものである。

【参考文献】

- 李鳳(2008) 「『思う』と『생각하다』の用法について」 『日本語学研究』 22, 韓国日本語学会, 231-241 頁
- 李鳳(2009a) 「『思う』と『생각하다』のヘッジ(hedge)としての機能について」 『日本語学研究』 25, 韓国日本語学会, 143-156 頁
- 李鳳(2009b) 「『思う』と『생각하다』のモーダルとしての用法に関する考察」 『日語日文学研究』 69, 1, 韓国日語日文学会, 375-389 頁
- 李鳳(2014) 『「思う」と「생각하다」の日韓対照研究—ヘッジとポライトネスの観点から—』 北海道大学博士論文, 105-168 頁
- 李鳳(2015) 「ポライトネス・ストラテジーとしての「思う」と「생각하다」—指示型の発語内の力を持つ文において—」 『日本文化学報』 64, 169-182 頁
- 임영철他(2011) 「한·중·일 언어행동에 관한 설문조사·인터뷰조사의 분석자료집」 『한·중·일 3국의 이문화 커뮤니케이션에 관한 보편성과 특수성 연구』 2008년도 기초연구 과제 지원 사업 인문사회분야 보고서 (KRF-2008-321-A00114, 182-207頁
- 鄭夏準(2006) 「『と思う』의 번역례 연구」 『日本語文学』 31, 韓国日本語文学会, 289-308 頁

- 井出祥子(2006)『わかまへの語用論』大修館書店, 49-57 頁
- 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開」『月刊言語』, 31, 1,大修館書店, 101-105 頁
- 元智恩(2005)『日韓の断りの言語行動の対照研究：ポライトネスの観点から』筑波大学博士学位論文, 1-276 頁
- 生越直樹(2008a)「日本語「と思う」と朝鮮語「고 생각하다」について」『日本語と朝鮮語の対照研究Ⅱ』東京大学21世紀CEOプログラム「心とことば－進化認知科学的展開」研究報告書, 47-54頁
- 生越直樹(2008b)「相手所有物を使う際の言葉の有無に関する日韓比較」尾崎喜光編『対人行動の日韓対照研究－言語行動の基底にあるもの－』ひつじ書房, 31-60 頁
- 生越直樹(2012)「「配慮」の示し方－日本と韓国の言語行動の比較から－」三宅和子/野田尚史/生越直樹(編)『「配慮」はどのように示されるのか』ひつじ書房, 171-187 頁
- 申媛善(2008)『文末スタイルの運用に関する日韓対照研究－人間関係の変化とポライトネス・ストラテジーの関わり－』,筑波大学博士学位論文, 1 178 頁
- 千守城(2005)『比較言語文化論による日本語の言語文化－異文化理解教育としての日本語教育－』J&C, 37-38 頁
- 塚本秀樹(1997)「日本語と朝鮮語の対照研究」『日本語と外国語との対照研究Ⅳ日本語と朝鮮語(上巻)』国立国語研究所,くろしお出版, 37 50 頁
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって－文の意味としての主観性・客観性－」『日本語学』11 卷9号, 明治書院, 105-116 頁
- 柳慧政(2012)『依頼談話の日韓対照研究－談話の構造・ストラテジーの観点から－』笠間書院, 1-285頁
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1978/1987)*Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press. pp.55-60.
- Itani, Reiko(1996) *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*, Hituzi Syobo. pp.9-53.
- Yang Huang(2007) *Pragmatics*, Oxford University Press. pp.91-131.

要 旨

There has been increasing studies on the different usage of ‘omou’ and ‘saenggakhada’ in recent years. Prior research did not include a theoretical concept of ‘omou’ and ‘saenggakhada’ and therefore was unable to provide a scientific explanation in the comparative analysis of these two words.

Drawing on the notion of *hedge* and politeness theory, this paper focuses on ‘omou’ and ‘saenggakhada’ used as assertives for politeness strategy.

Prior research has shown that ‘omou’ and ‘saenggakhada’ co-occurs with a sentence which has illocutionary force as assertives. However, applying the “weightiness (W) of a face-threatening act (FTA_x)” from theory of politeness by Brown & Levinson (1978/1987) as a theoretical framework for the analysis,

this paper finds that ‘omou’ is used as *hedge* in a sentence which has illocutionary force as assertives, regardless of the degree of distance (D) and extent of risk (R). In contrast, ‘saenggakhada’ is constrained when used as *hedge* in a sentence which has illocutionary force as assertives in following incidences : a) where risk (R) is high and distance (D) is far, b) where risk (R) is low and distance (D) is far in the value of relationship.

According to Itani (1996), “cultural aspects play an important role since the ‘appropriate’ amount of social hedging varies from culture to culture.” Using ‘omou’ and ‘saenggakhada’ as *hedge* supports this observation, and it can be witnessed in the context of both languages - Japanese and Korean.

키워드 : omou, saenggakhada, hedge, speech act theory, politeness, assertives

투 고 일 : 2015. 2. 28
심 사 일 : 2015. 3. 14
게재확정일 : 2015. 4. 4